

「昭和 100 年」関連施策実地レポート

このコーナーでは、内閣官房「昭和 100 年」関連施策推進室の室員が、各地で開催されている関連施策を訪問し、感想を含め皆様へご紹介します。

今回の訪問先は、江東区芭蕉記念館です。

2025 年度後期企画展「収蔵資料からみる昭和の俳人」

URL：[2025 年度後期企画展「収蔵資料からみる昭和の俳人」 | 芭蕉記念館 | 公益財団法人 江東区文化コミュニティ財団](#)

江東区芭蕉記念館（東京都江東区常盤 1-6-3）では、令和 8 年（2026 年）が昭和元年から数えて 100 年にあたることを記念して、当館が収蔵する資料から昭和の俳壇を彩った俳人たちを紹介する企画展が開催されています。

訪問日は、令和 8 年 3 月中旬。幅広い年齢層の方が、企画展示作品や芭蕉に関する展示を熱心にご覧になっていました。館内にはたくさんの松尾芭蕉に関する資料や説明パネル、芭蕉ゆかりの地としての周辺マップなども展示されており、また江戸期以降の俳人の系譜や平安期以降の俳句に関連する年表など、筋立てて幅広く楽しく学べる工夫が施されています。エントランスを抜けると玄関前には和を感じさせる中庭があり、伺った当日は落語会や句会も開催されており、施設全体に伝統文化を楽しめる心地よさを感じました。



中庭



展示風景



企画展示は、明治期以降の近現代の俳壇の歴史や作品を概括できる構成です。

第1章「ホトトギスから自由律、新興俳句」では、明治期の俳句革新運動以降の正岡子規や高浜虚子、その他門下の高野素十など、また「ホトトギス」の客観写生に対し、それを排し情緒的な作風の先駆けとなった水原秋櫻子や、自由律俳句を提唱した河東碧梧桐などといった著名な俳人の自筆短冊や関連資料・説明パネルが展示されています。同じ子規門下でありながら、異なる作風の虚子と碧梧桐。それぞれの特徴や俳壇に及ぼした影響など、丁寧にわかりやすく説明されており、予備知識のない私でも両者の違いが良く理解でき、また作品を楽しむことができました。

第2章は「人間探求派と女性俳人」。昭和初期の女性俳人の活躍や、より深い人間の内心を思索し題材とする人間探求派、戦後の第2芸術論騒動や多様な属性の俳人による活躍等、昭和期の俳壇の諸相について展示されています。虚子は、女性にも活動を促し、多くの女性俳人を指導したそうです。身の回りの事物を題材に詠むことを推奨し、「台所俳句」と否定的なニュアンスで呼ばれることもあったようですが、虚子はそれをむしろ好意的に捉えたとのこと。一方で、日常生活を題材とせず硬質な作風で独自の地位を築いた中村苑子や、その逸話から多くの小説等の作品で題材にされた杉田久女のように、存在感のある女性俳人も輩出したそうです。

俳句の展示は、俳句自体の鑑賞はもとより、短冊等にかかれた俳人自筆の書風も楽しめるとのこと。「ホトトギス」の俳人の書風は大きく伸びやかで、自由律俳句はデザインされたような独特の文字、中村苑子の自筆色紙の書風からは他の女性俳人のそれとはまったく異なる印象を受けます。戦後の新興俳句の短冊には絵が描かれています。私は、長谷川かな女の繊細で控えめながら抑揚のある書風に、彼女の内面に秘した俳句への強い想いを感じました。

俳句について予備知識は全くなく、俳句の企画展示を鑑賞するのも初めてでしたが、説明パネルを読みつつ俳壇の歴史や人間模様、作風の違いなどを踏まえながら、短冊や句幅にかかれた俳人自筆の書を鑑賞すると、昭和の時代を生きた俳人たちの人間性や息遣いを感じとることができ、これまで全く知らなかった俳句の魅力を楽しむことができました。

会期は4月26日まで。毎月第2土曜日には、小学生向けの俳句教室も開催されています。

会期：令和7年12月12日（金）～令和8年4月26日（日）

主催：江東区芭蕉記念館

住所：東京都江東区常盤1-6-3